

婚約破棄からの追放とフルコースいただきましたが、
隣国の皇子から溺愛され甘やかされすぎて
ダメになりそうです。

ギルティア

強い浄化の力をもつ聖女。その力でもって彷徨う魂を天上に導くことができる。死者を悼むために常に黒いドレスを着ているが、そのせいで「死神聖女」と呼ばれることも…

レクシアス

魔物がはびこる「冥府の森」の管理人。眉目秀麗かつ有能だが、ギルティアに執着しすぎるあまり、時々暴走してしまう。

ブランド

カメロン王国の第三王子。ギルティアの婚約者だったが、彼女を陰気臭いと嫌い、婚約破棄をつきつけた。

サリエル

ミッシェルの姉で、公爵家の嫡子。

ミッシェル

ゼノビス公爵家の次女で、浄化の聖女。なにかにつけギルティアに突っかかってしまう。ブランドの婚約者になるようにしている。

ゼノビス公爵

ミッシェルの父。虎視眈々と国を牛耳るためのチャンスを窺っている。

Characters

登場人物紹介

目次

婚約破棄からの追放とフルコースいただきましたが、
隣国の皇子から溺愛され甘やかされすぎて
ダメになりそうです。

女神のご褒美

婚約破棄からの追放とフルコースいただきましたが、
隣国の皇子から溺愛され甘やかされすぎて
ダメになりそうです。

第一章 死神聖女は自由になりたい

「ギルティア・エル・マクスター、死神聖女である貴様との婚約はこの時をもって破棄し、私は新たにミッシェル・リア・ゼノビスと婚約を結ぶ！」

死神聖女——私はそう呼ばれている。

煌びやかなシャンデリアの光が降りそそぎ、目の前の婚約者の金色の髪を美しく輝かせている。

私の婚約者であるカメロン王国の第三王子ブランド殿下は見た目だけは素晴らしく、どこにいても注目の的になっていた。今もその容姿と高らかな宣言で、貴族たちの視線を集めている。

この場合は第二王子の誕生祝賀会。幸か不幸か、国王陛下たちはまだ入場していない。

「……ブランド殿下、正気でございますか？」

思わず本音がぼろりとこぼれてしまった。

このカメロン王国には、民を守るための特別な存在として聖女という役職がある。

聖女は能力によって三種類に分けられ、攻撃が得意な『破魔の聖女』、結界が得意な『守護の聖女』、そして彷徨う魂を天上に導く『浄化の聖女』がいた。それぞれの聖女の頂点に立つのが、国王から任命された認定聖女で、各聖女の中で一番力の強い者が選ばれる。

この認定聖女を中心にして、王国は凶暴で邪悪な力を持つ魔物から人々を守っている。さらに認定聖女はその優秀な遺伝子を残すため、王族、あるいはその近親者との婚姻を義務づけられていた。私は伯爵家の長女だったが、浄化の認定聖女として十歳の頃から役目を果たしていて、例に漏れず第三王子の婚約者でもあった。

……もう過去形のようにだけれど。

「正気かだ!? 当たり前だ! 冗談でこのようなことを言うわけがないだろう!」

「そんなに大声で叫ばなくとも聞こえておりますわ。でも、そうですか……本気ですのね?」

ブランド殿下の腕にしなだれかかるようにして立つのは、私の次に浄化の力が強いゼノビス公爵家の次女ミッシェルだ。ふわふわのピンクブロンドの髪と水色の瞳が愛らしい令嬢である。

聖女と権力者との婚姻が繰り返されてきたので、この国では高位貴族に力の強い聖女が生まれやすい。適性がある女兒は専門の教育機関である中央教会に所属し、共同生活を送ることになる。当然私もミッシェルも、中央教会の施設とともに過ごしてきた。

そういえば、ミッシェルはやたらと私に突っかかってきていたわね。たいして害がなかったから放っておいたのだけど。

「ああ、本気に決まっているだろう! 貴様の着ている黒いドレスは陰気臭くて我慢ならん! 私があなに話してもニコリとも笑わず、あまりにも不気味だから死神聖女と呼ばれているのに、改善もしないではないか!」

「……黒いドレスを着ているのは死者の魂を弔うためですわ。ニコリともしないのは申し訳ないこ

とでしたが、殿下のお話には笑顔になる要素がございましたので」

「なあっ!？」

確かにブランド殿下の指摘は間違っていない。

私は浄化の認定聖女になってから、黒いドレスしか着ていない。それでも、流行の形を取り入れたり、レースをふんだんに使ってみたり工夫はしていた。

今日のドレスだって王室御用達のデザイナーに頼んだもののに。

笑顔を見せないのは、ブランド殿下がお話する内容が、どこそこの令嬢にアプローチされたのだの、有名な画家に肖像画を描かせたのだの、どうでもいいことばかりだからだ。たまに語る武勇伝でさえ、前線から遙か後方で安全に討伐したというもののなのですもの。いえ、王子様ですから安全を確保しなければいけないのは理解できるのだけど。

ただ、いつも最前線で魔物の討伐をしている私は、どうしても彼を持ち上げることができなかったのよ。

「くっ！これだけではない！今日は貴様の非道なおこないを明らかにするために、この場を選んだのだ！」

「非道なおこないですか？ いったいどのような？」

まるで心当たりがない。

「ミッシェルから聞いているぞ！貴様は中央教会でミッシェルに髪飾りやアクセサリー、艶やかなドレスの着用も禁止したそうだな？ミッシェルは陰険な仕打ちをされたと泣いていたのだ

ぞ!!」

「……中央教会では魔物との戦闘訓練がございますので、アクセサリー類の着用はもとも禁止されています。ドレスについては、浄化の際に魂になった方から伝言を頼まれて、ご遺族様に訪問することがあります。その際には暗い色のものを着るように言いました」

実戦ながらの模擬戦闘があるのに、アクセサリーなんて着けていたら大きな怪我につながりかねないし、死者の最後の言葉を伝えるのに派手な格好でなんて行けるわけがないでしょう。悲しみにくれるご遺族の神経を逆なでしたいのかしら？

「そ、そんなっ！だが、伯爵家である貴様が公爵家のミッシェルに命令するのは不敬であるう!!」

「お忘れですか？私は認定聖女なので、王族の皆様と同等の立場ですわ」

だからといって、わがままを言うわけではないけれど。

「しかし、戦闘訓練の時にミッシェルにわざと怪我をさせただろう！ミッシェルは心に傷を負って、一カ月も外に出られなかったんだぞ!？」

ブランド殿下の言葉に、はてと考える。

怪我をした後、一カ月外に出られなかった？ああ、ひと月も引きこもった上に私のせいだとわめき散らしていたアレのことかしら。

「……その時突き飛ばしてなければ、ミッシェルは飛んできた剣でもっと大怪我をしておりますた。心の傷かどうか存じませんが、確かにひと月は怪我が治ってもお休みされていましたわね」

突き飛ばして怪我をさせたといっても、手と足を少し擦りむいただけで……公爵家の令嬢には大怪我になるのかしら？

訓練をお休みして、毎日優雅にティータイムをとっていたのは知っているけれど。なんだか、話していても疲れるわ。

一週間におよぶ魔物討伐から、やっと戻ってきたところなのに。

毎度のことだけど婚約者から労りの言葉もない。この祝賀会に出ることさえウンザリしているのをわかってほしいわ。

ブランド殿下のおっしゃる内容がくだらなすぎて、耐えられない。今すぐ解放してくださいかしら。

待って、解放？

あら……私、気付いてしまったわ。

目の前に転がっているのは、またとないチャンスではなくて？

嫌だわ、気付いてしまったらニヤけてしまうじゃない。今こそニコリともしないと言われた無表情を貼りつけないければ！

「もう結構ですわ。婚約破棄を承ります」

「っ！　ようやく自分の罪を認めたのだな!!　それでは、ギルティア・エル・マクスターから即刻、認定聖女の地位を剥奪し、『冥府の森』へ追放とする!!」

「かしこまりました」

台本でも用意していたのだろうか。言い終えたブランド殿下は得意気に胸を張っていた。

冥府の森……魔力の磁場が狂っていて、魔物が大量発生する危険地帯ですわね。

あの地を管理しているのは、大陸一の軍事力を持つユークリッド帝国。許可なく森に立ち入った者は魔物に喰われるか、管理している帝国軍に侵入者として捕らわれると聞いていますわ。

ブランド殿下が許可など取っているわけないわね。そう、どうやっても私を処分したいというの。

近衛騎士に促され、私はわざと俯きながら会場を後にした。会場内は静けさに包まれていたけど、私の頭の中はこれからの準備のことについてばいだ。

とにかくこの状況がひっくり返らないうちに、さっさと冥府の森に向かわなくては。

騎士たちに思いのほか丁寧に馬車に乗せられたところで、私は思いつきりにんまりと笑う。

このチャンス、絶対にものにするのよ！

あのボンクラ王子から離れられて、しかもまったく自由のなかった聖女生活から解放されるのですもの！

なんとしても冥府の森の管理者から逃げ切って自由を手に入れなくては……!!

冥府の森で生き抜くために最低限の荷物だけでも取りに行きたい、と護送してくれる騎士たちに伝えると、中央教会に立ち寄ってくれることになった。

私室に行き必要なものをマジックポーチに詰め、家族宛の手紙を書いて中央教会に託す。

私が聖女になってからは離れて暮らしているけど、父と兄は変わらずに愛し続けてくれた。父は母が亡くなった後も後妻を娶らず、兄もまた十歳からひとりの女性を想い続けるほど愛情深い。

私がこんなことになって悲しませてしまうのが心残りだった。だからこれは私が望んで追放されたのだと、どうか悲しまないでほしい、としたためた。

そうして聖女の制服である黒い膝丈のドレスに着替えて、また馬車に乗り込んだ。王都を出たところで騎士たちが転移の魔道具を使い、冥府の森へと移動した。正直、ニヤニヤするのを我慢できていたか自信がない。

こうして無事に冥府の森へと追放していただき、私は自由への一步を踏み出した。

冥府の森で暮らし始めて一週間が経った。

私は森のど真ん中で純白の折りたたみ簡易テーブルを広げ、ゆつたりと椅子に腰かけて優雅なティータイムを楽しんでいる。このテーブルセットは魔物討伐の遠征中でも、聖女が心のゆとりを保てるように考案された優れたものだ。

鼻先をかすめるお茶の香りが中央教会でよく飲んでいたものと似ていて、荒波のようだった日々が思い出される。

中央教会に十歳で所属して、八年が過ぎた。

聖女の力が発露した少女たちは問答無用で家族と引き離され、中央教会の管理下で国のために力を使えと強要される。そして魔物討伐の最前線に出ても簡単には死なないようにさまざまな訓練を課せられていた。

地獄のような訓練をこなし最前線で魔物たちと戦ううちに、ずいぶんメンタルも鍛えられた。

死神聖女と呼ばれ、貴族社会から疎まれ嫌われていても、命をかけた戦闘の前にそんな些細なことは気にならなくなった。

なにより仲間たちにはちゃんと理解されていたし、小さな世界にとらわれる貴族たちを哀れだと思っていた。

貴族たちは家門から聖女を輩出して評価を高めるため、あらゆる手を使って聖女を伴侶として迎えようとする。そして子供を産ませた後は放置するのが常だ。

特に認定聖女は、結婚相手は王族かその血筋の貴族と決まっていて、逃れることは許されなかった。ただただ押しつけられたものを受け入れて、国のために身を粉にして働く。それが聖女だ。

だからこそ仲間は大切な存在だったし、私だけ自由になって申し訳ないと思っている。

「いけないわ。あまりに平和すぎて過去を懐かしんでしまったわね」

私は気持ちを切り替えて、今夜の食事について思考を巡らせた。

「今日の夕食はアグリボークのステーキがいいわね。昨日森の奥で見かけたあの獲物に決めたわ」この冥府の森はほとんど人の手が入っていない。そのため動植物が豊富で、食糧には困らなかった。

昨日薬草の採取をしている時に見つけた獲物——アグリボークを思い出す。むっちりとした肉は、塩を振って焼いただけでもきつと美味しいだろう。

飲み終えたカップを魔道具で清浄して、テーブルと椅子を片づける。そして、それらを腰につけたマジックポーチに収納していく。このマジックポーチは聖女に支給された魔道具で、冥府の森で

生き抜くためには必須だと思い持ってきたのだ。本当にいろいろな場面で役に立っている。

片付けを終えた私は鼻歌を歌いながら、軽やかに森の奥へと足を進めた。

ここ冥府の森は磁場が狂っていて、常に高濃度の魔力が渦巻く特殊な土地だ。そのせいで浮かばれない魂が世界中から集まってくるのだ。魔力を取り込んで穢^{けが}れてしまった魂は実体化して、人々に襲いかかる。それが魔物の正体だ。

穢^{けが}れた魂は聖女が使う魔法で浄化されない限り、たとえ倒されても時間が経てば復活してしまうので不死の魔物と呼ばれている。

生前の想いが強ければ強いほど強力な魔物となって目的を果たそうと暴走し、街や村を破壊していく。そんな危険な魔物がうようよ湧いてくるのが冥府の森だ。

だからいくら緑と清らかな水があふれ、肥沃^{ひよ}な土壌で貴重な魔石がふんだんに眠る場所だとしても、治めるのは困難を極めた。

現在は大陸一の軍事大国であるユークリッド帝国が管理している。帝国はこの危険地帯に屋敷を建て、軍の中でも指折りの猛^も者^さをその管理者として常駐させているらしい。

今のところ、その管理者には見つかっていないはずだ。というか、とんでもない危険地域なので、帝国軍以外の人間は、ほばいない。

たまに見かけるのは、魔石を無断で採取しに來た冒険者くらいだ。冥府の森はその性質から、高濃度の魔力を含んだ鉱石が魔石となってその辺にごろごろ転がっている。

質のいい魔石は高級魔道具の製作でよく使われるため、かなりの高値がつく。だけど、そんな不屈き者も帝国軍の騎士たちがすぐに捕縛して連行していった。

無断で侵入した者は捕らえられ、牢に入れられると聞いている。自由を手に入れるためには、ここで帝国軍に捕まるわけにはいかない。そのため騎士を見かけたらすぐに転移魔道具を起動して逃げ回っていた。

できるだけ帝国軍の騎士に会わないようこっそりと控えめに過ごして、サクッと隣国に抜けよう
「それにしても……虫すら姿を消しているなんておかしいわね」

狩りをするために森の奥へ来たけれど、明らかにいつもと様子が違う。

ここまで生き物の気配がしないなんて、ありえない。

次の瞬間、耳に届いたのは大地を震わせるような咆哮^{まう}だった。

『グオオオオオオオ!!』

巨大な魔物が丸太のような腕を振り回して、木々をなぎ払っている。瞳は自我を失っているようだった。五メートルもある身体全体に包帯が巻かれたアンデッドモンスター、これはグレートマミーだ。

煮えたぎった血のような紅い双眼が、私を捉える。

こっそりと控えめにしたのに、こんな大きな魔物に狙われたらそうも言っていられない。

どうか帝国軍に見つかりませんようにと強く祈りつつ、浄化魔法を発動させる。

「黒薔薇の鎮魂歌^{レクイエム}」

グレートマミーにしばらく絡まる。その無数にある棘が、魔物の魔力と、負の感情を取り込んでいく。やがて黒い薔薇が咲き乱れ、はらはらと散っていった。

黒い花びらが舞い散る、幻想的な景色。

グレートマミーがしばむように消えて、その後に現れたのは、すっかり浄化された七色の魂だ。

「最後の言葉はあるかしら？」

『ありが……どう』

それだけ残して艶やかに輝く魂は天へと還っていった。

どんな想いを残したのかはわからない。でも、どうか来世は穏やかに過ごせますようにと、そう願った。

私を含めて浄化の聖女と呼ばれる者たちには、ふたつの役目がある。ひとつめの役目は破魔の聖女たちが倒した魔物の魂を浄化することだ。通常は守護の聖女が張った結界の中で魂の浄化をする。けれども、私は前任の浄化の認定聖女様のスパルタ教育のおかげで、倒されていない魔物の魂も浄化できるようになってしまった。あの時のみんなの驚いた顔は今でも覚えている。

ふたつめの役目は、浄化した魂がこの世に残した最後の言葉をご遺族に届けることだ。

魂が天に還る際に、魔物になってしまった原因ともいえる強い想いを、浄化をした聖女だけが聞くことができる。聖女になってからの八年間、この魂の最後の言葉を届ける時はいつも心を払われる。

私の言葉で悲しみにくれる人や遺産の心配をする人、まるで興味を持たない人、いろんな人たちがいた。

悲しみから責め立てられることも多々あって、私はやがて笑うことを忘れていった。

ちなみにブランド殿下の話は心底つまらなかったで、真顔になっていただけだ。

「さて、魔物が消えたから今度こそ獲物を狩れるかしら？」

そう思って、生き物の気配を探った時だった。

カサリと音を立てて葉が揺れる。ハッとして音がした方に視線を向けた。

そこにいたのは、ひとりの青年だった。

スラリとした長身に、柔らかな黒髪がふわりと風に揺れている。私を見つめる琥珀色の瞳は、驚きに見開かれていた。スツと通った鼻筋と、ほどよい厚みのある唇が温かい印象を与える。

どこからどう見ても美形と言って差し支えない、見目のいい男だ。黒っぽい衣装をまとう姿は隙がなく、腰に佩いた剣と付まい、あふれるような魔力から只者ではないとわかる。

人間……こんなところに？ 私も人のことは言えないけれど。ああ、もしかしてこの方も同じ理由で驚いていらつしやるのかしら？

「あの……？」

声をかけてから、ひとつの可能性が頭をよぎる。

冥府の森の管理者——まさか、この優しい青年が？

この前見た軍人とは格好が違うようだけれど。

ただ、こんなところにいる人間が一般人でないのはわかる。私のように追放されたのか、それとも帝国軍の人間なのか。または魔石を窃取しに来た冒険者か。

さりげなく見極めていたら、彼の剣にユークリッド帝国軍の紋章が刻んであることに気が付いた。しまった！ 帝国軍の人間だわ！ ということは管理者側!?

これは、逃げるしかない!!

私はとっさにマジックポーチから緊急避難用の転移魔道具を取り出し、起動させた。

「おい！ 待つ——」

目がくらむほどの光に包まれて身体がフワリと軽くなる。

少ししてまばゆい光が収まったので目を開くと、三日前にテントを張った大岩の前に立っていた。確かに逃げ出せたはずのだけど——

「ギルティア」

振り切ったはずの男は、すでに私の転移先にいた。

転移の魔道具が壊れたわけではない。ちゃんと発動したし、さっきとは違う場所に私は立っている。目の前の大岩がその証拠だ。

男はその大岩にゆったりともたれかかり、私をじつと見つめている。

「な!? なぜ私の転移先にいるの!？」

「ああ、俺は転移魔法が使えるから、魔道具より速く移動できる。それより、だいぶ無理したな。少し眠るといい」

「えっ……!?」

男が私に手をかざすと、甘い匂いがふわりと香る。途端に頭がクラクラとして身体から力が抜け

ていった。

ここで倒れたら、ダ……メ——

最後に感じた包まれるような温もりに、なぜか懐かしさが込み上げた。

どんなに抗^{あらが}つても私の意識は深い闇の中へ落ちていく。

「やっと……捕まえた」

青年が呟いた言葉を薄れゆく意識では拾うことができず、私の記憶はそこで途絶えた。

第二章 死神聖女は逃げ出したい

ああ、なんて心地いいかしら。

ふかふかのベッドで暖かい毛布に包まれて、幸せすぎるわ。

なにより、こんなにゆっくり眠れるなんて久しぶり……え、待つて。

勢いよく起き上がった、ここがどこかの建物の一室であることに気が付いた。着ているものも、いつの間にか白いナイトウェアになっている。想像していたのと違う状況に困惑する。

「私……捕まった……わよね？」

慌ててベッドから降りて扉を開けようとするも、ガチャガチャと音が鳴るだけで開かない。窓があったので身を乗り出して外を見渡したけれど、鬱蒼^{うつそう}と生い茂る木々が広がっているだけだった。

街の気配はまったく感じられないし、前方にある木々の間から魔物が飛び立ったのが見えたから、まだ冥府の森の中にいるようだ。窓から見る限りここは三階で、バルコニーもないから降りられない。

冥府の森に存在する建物……そんなの帝国軍が駐在する屋敷しか考えられない。おそらく気を失っている間に帝国軍が管理する屋敷まで運ばれて、牢屋代わりにこの部屋に閉じ込められたのだ。サーツと血の気が引いていく。

八年にも及ぶ自由がきかない聖女の生活からやっと抜け出して、いざこれからという時に牢屋に入れられてしまうの？

「嘘……これが私の人生なの？」

なにも知らなければ耐えられた。でも私は自由を知ってしまった。わずか一週間だったけれどやつと息ができて、大空を飛ぶ鳥になったみたいだった。

あの解放感を忘れられるわけがない！

「なんとしても逃げてやるわ！」

この八年で培^{ちか}った、ど根性魂がムクムクと起き上がる。

聖女の訓練は過酷だったから、これくらいのことではへこたれない。私は高速で頭を回転させて、部屋の中を物色しながら逃亡計画を立てた。

針金なんて落ちてないわね……ナイフやフォークなどの金属類もない。

扉を開けられそうなのはなにもなかった。それなら、もう窓しかない。シートやカーテンを使つて、下まで降りられないかしら？

シートをベッドから剥^はぎ取り、カーテンも体重をかけてなんとか取り外して、一本の長い長いロープにする。それをベッドの脚にくくりつけて窓から垂らした。

「少し長さが足りないみたいだけど……まあ、最後は飛び降りればいいわね」

正直怖い。こんなこと、いくら聖女の訓練でもやったことなかった。

でも自由を奪われるのだけは、耐えられない。

覚悟を決めて、シーツを握りしめた。

そっと窓枠に足をのせて身体の向きを変える。シーツをしつかりと掴んだまま、気合を入れて窓の外に出た。

途端にベッドがズルズルと動いて、そのまま私の身体も落ちてゆく。

ぎゃあああああああああ!!

こっ!! こ、怖いですわ——!! 逃げる前に死ぬわっ!!

心臓がバクンバクンと激しく音を立てているのがわかる。口から心臓が出そうになるとはまさにこのことだ。

それでも叫ばなかったのは及第点だと思う。まだ揺れている身体をなんとかしようと、外壁に足をついた。

はああ、本当に死ぬかと思ったわ!

少しだけ淑女らしくなかったけれど、まあ、誰も見てないからいいわよね。

そう、誰も——

降りようと下を見たところで、バッチリと琥珀色の双眸と視線が合った。

あの帝国軍の男がいやらしい感じでニヤリと笑い、二階の窓から身を乗り出している。その手には、しっかりとシーツが巻き取られていた。

「また逃げられるところだったな」

こうして私の逃亡計画は終わりを迎えたのだった。

「いい加減にしてもらえないかしら?」

「ククッ……いや、もう少し……ブフッ、待ってくれ……クククッ」

目の前の男は先ほどの私の無様な様子に、いまだ腹を抱えて笑っている。

かれこれ十分以上は笑っているのではないかしら? 本当に失礼な男だわ。私なんて、まだ心臓が口から飛び出そうなほどバクバクしているのに!

「それで、私はこれからどうなるの? どこの牢屋に入れられるの?」

「ははっ……は? 牢屋?」

「貴方はユークリッド帝国軍の人間でしょう? ここはユークリッド帝国が管理しているのだから、私は不法侵入者として処罰を受けるのではなくて?」

実際にこの森に入ったと思われる者は、誰ひとり帰ってきていない。まともな扱いをされるかどうかもわからない。

だけど最後は本当の私らしく、後悔の念を持つことなく天に還りたい。

「もう覚悟は決めたわ。せめて楽に処刑してちょうだい」

「いや待て、誰がそんな物騒な話をした?」

心底わからないという表情だ。

私の覚悟はできているのだから、隠さなくてもいいのに。

「誰がって……ここは冥府の森よね?」

「そうだ」

「ユークリッド帝国軍が管理しているのよね？」

「ああ」

「それなら私は許可なくこの森で生活していたのだから、不法侵入者よね？」

「いや、そこが違う」

「え？」

「なんですって？　なにがどう違うのよ？」

青年はようやく笑いがおさまったらしく、いたって真剣に話をしてくれる。その様子に嘘はないようだ。

「ユークリッド帝国が管理はしているが、所有はしていないから不法侵入にはならない」

「……そうなの？　それなら私は侵入者として牢屋に入れられるのではないの？」

「魔石を窃取^{せしゅ}しに來たなら話は別だが、罪を犯していないのに牢屋に入れるわけがないだろう。少なくとも帝国軍が管理している限り、そんな横暴なことはしない」

呆れたように小さなため息をつき、青年は説明をしてくれた。

「なんてことなの！　私はまだ自由なのね!!」

私は嬉しくて、満面の笑みを浮かべる。

青年はなぜかカキンツと固まった後、咳払いして姿勢を正す。そして真正面から私を見すえて続けた。

「自由なのは構わないが、最低限の条件はつけさせてもらう」

「最低限の条件？」

青年はぐつと眉間にシワを寄せて、一切の妥協を許さないというような決意に満ちた表情で条件を挙げていく。

「まず、テントは禁止だ」

「あら。それなら寝袋はいいのかしら？」

青年の眉間のシワが一本増えた。

「もつとダメだ！　次に狩りも禁止だ」

「それなら釣りしかないわね。道具の用意は頼めるかしら？」

青年は眉間のシワをさらに増やして、激しく禁止事項を口にする。

「道具は用意しない！　野草だけで食事を済ますのもダメだ！　結界も張らずにのんびり外でお茶を楽しむのもダメだ！」

「待って、それでは私がここで生きていけないわ！　食べるものは森の中で手に入れないと無理よ！」

あまりの厳しい条件に思わず大きな声を上げてしまう。森で手に入れないのなら街まで買に行かなければならないのだが、最寄りの村まで歩いて片道二日はかかる。

念のために持ってきていた転移魔道具は帝国軍の騎士たちから逃れる時使っていたので、次は魔石を交換しないと利用できない。魔石を交換するにも街にある魔道具専門店まで行く必要がある。



馬車なんてこの辺は通らないし、そこまで歩いていけということなのか。

……それにしても、ここに来てからの暮らしが筒抜けだ。どうやら私の存在はバレていたらしい。必死に逃げ回っていたのに、なんともいえない気持ちになる。

「無理ではない。この屋敷にいればいい」

「……なにを、おっしゃっているのか、よくわからないわ」

この方はなにを血迷ったことを口走っているのかしら？ 私はそんなことを望んでいるわけではないわ。ただ自由がほしいだけよ。

「このお屋敷はユークリッド帝国のものではないの？」

「正確には帝国から派遣された管理者と騎士たちが使える屋敷だ」

「それなら尚更ですわ。私はカメロン王国の元浄化の認定聖女で、追放されてこの森に捨てられた者です。ここでお世話になるわけにはいかないわ」

これでわかってくれたかしら？ あまり話したくなかったけれど、納得してもらうためには仕方ないわ。

「……追放の話は知っている。いったいなぜそんなことになったんだ？」

「そうですね。簡単に申し上げると、新たな想い人ができた元婚約者が、私から認定聖女の地位を剥奪し冤罪を着せてこの森に追放したのです」

自分で説明しておいてなんだけど、相当悲惨な話に聞こえる。ひどすぎて笑えてくるほどだ。

「なるほど……それは後で詳しく聞かせてくれるか？」

え、どうしてこの方が機嫌を悪くするの？ なにか気分を害するような内容だったかしら？
「ええ、それは構わないけれど……私はむしろ自由になって喜んでおりますの。だからできれば好きにさせてほしいのです」

すると彼はふわりと溶けるように優しい顔になって、琥珀色の瞳で私を見つめてくる。この方の反応がいまいち理解できない。

「本当に君は……ならば、管理者としての命令だ。ギルティア・エル・マクスター。君が冥府の森にいる間は、この屋敷に逗留せよ」

「いえ、ですから私は自由が……私は、名乗っておりませんわ……そういえば森でも名を呼ばれたような……しかも管理者？ 貴方は管理者ですの!？」

「ああ、俺が冥府の森の管理者レクシアス・ハデスだ」

なんてこと！ この方が管理者だったなんて、聞いてなくてよ——!?

* * *

冥府の森の管理者レクシアス・ハデス。俺がそう呼ばれるようになってから、もう三年が経った。まさかこんな場所でギルティアと会えるなんて想像もしていなかった。

俺の目の前でころころと表情を変える彼女から目が離せない。そんなギルティアを堪能しながら、俺は初めて彼女と会った時のことを思い出していた。

俺がギルティアに出会ったのは十一歳の時だ。

俺は父の仕事に同行してカメロン王国を訪れていた。後学のためにと、毎回必ず兄弟の誰かが連れていかれていた。その時はたまたま俺だったんだ。

父たちが仕事の話をしている間は、俺の遊び相手として仕事相手の娘があてがわれた。それがギルティアだった。

銀糸のような細い髪は光に透けてキラキラしていて、神秘的な紫の瞳は宝石のアメジストみただった。まあ、それだけならここまで俺の心に残らなかったと思う。

ある時ふたりで庭園を散歩中に、鳥の雛が巣から落ちて怪我をしているのを見つけた。ギルティアはその雛を介抱すると言い出して、俺も暇だったから世話を手伝った。でもその甲斐なく、雛はわずか三日で儼はかなくなってしまうた。

ギルティアが泣くと思った。彼女はまだ八歳の子供だし、泣かれたら面倒だなんて思っていた。

ただどその八歳の少女は凛とした佇まいで、聖女の特別な魔法を使った。

『黒薔薇の鎮魂歌』

ギルティアがそう言うと、雛の魂は七色の光を放って彼女の前に現れた。黒薔薇の花びらがあたりに舞い散っていて、とても美しかった。心を奪われたのはその時だ。

俺の目にはギルティアしか映らなくなった。

『最後の言葉はある?』

とても不思議な光景だった。俺には魂の言葉は聞き取れなかったけど、七色の光が天に還った後に彼女がこう言ったんだ。

『あの雛が、寂しい時に撫でてくれて嬉しかったと言っていました』

それを聞いて俺は不覚にも泣いてしまった。

夜は俺が雛の世話をしていたんだけど、寂しかったのは俺だったから。

後学のためと言って連れてこられても、いつも放置されていた。自国でも俺は妾の子供だったから待遇はよくなかったし、友達だってひとりもいなかった。母は長い間病に臥せていて甘えることもできなかった。

そつと触れた雛の温もりは心地よくて、俺の寂しさを埋めてくれた。

そんなみつともなく泣いている俺を、ギルティアは優しく抱きしめた。

俺より小さい女の子なのに、まるで包み込まれたようだった。

俺は完全にギルティアに堕ちた。

それから俺は勉強や剣術、魔法の習得に励んだ。ギルティアに求婚して受け入れてもらえるように、あんな情けない姿は二度と晒さないようにするためだ。そうして五年後に、また俺がカメロン王国に行ける機会が回ってきた。

前に会った時はメロンタルトが好物だと言っていたから、カメロン王国の王都で一番人気のある店も調べておいた。市井を視察するといえば、外出の許可は出るだろう。

やっと再会できると期待していたのに、話し相手として来たのはギルティアの兄だった。さりげ

なくギルティアのことを聞いたなら、浄化の認定聖女に選ばれて第三王子の婚約者になったという。

シヨックなんてものじゃなかった。その後なにをどうしていたのか、うる覚えだ。

あげく、この五年の努力の結果なのか、俺を厄介払いしたくてわざと危険な任務をやらせたのか、魔物があふれる冥府の森の管理者に任命された。まあ、その時の俺にはどうでもよかったから黙って引き受けた。

俺は冥府の森に引きこもって、砂を噛むような日々を過ごした。

森全体に結界を張り、とりあえず森から魔物たちが出られないようにして、増えすぎた時は間引きした。冥府の森の影響で結界の外でも魔物は大量発生していたけど、他国の領土だし、それくらいは自分たちで処理するべきだろう。

ああ、カメロン王国の方角だけはギルティアがいるから、結界の外も手が回る時は魔物を処理しておいた。磁場の影響なのか、そちらの方向はやたら魔物が多く発生していたからできるだけ気を配っていたんだ。ギルティアがああ国にいない以上、もう必要ないが。

魔物の異質な存在はよく目立つから、結界の中にいる個体ならすべて把握できていた。戦う時以外は、執務室でただ目の前の作業をこなすだけの時間を過ごした。

そんなある日、騎士たちから森に若い女性が迷い込んでいるという報告が上がった。たまに誤って迷い込んだり、なにかの罰でこの森に追放されたりする人間がいるので、今回もそうだと思っ

いた。いつものように見つけたら帝国へ連れていくか、希望の国へ送り届けるように指示を出して終わるはずだった。

ところがある日、俺の右腕である冥府の騎士団の副団長、エイデンから追加で報告を受けた。

「レクシアス様、先日報告した女性の件ですが、どうやら森で自活しているようです」

「は？　女がひとりでこの森で生活なんて……できるのか？」

冥府の森で自活なんて、聞いたこともない内容に耳を疑った。

「していますね。テントを持ち込んでいるようで、野営の跡もありました。騎士たちが声をかける前に姿を消すので、まだ本人から話を聞いていませんが」

騎士たちの報告をまとめると、テントで寝起きして、結界も張らずに優雅にお茶を楽しみ、魔物を狩ったり野草を摘んだりして過ごしているようだ。にわかには信じがたいが、複数の報告が上がつているから間違いないだろう。

場合によっては強制的に帝国に送り届けることも視野に入れて、あらためて指示を出した。報告書には銀髪の若い女性とある。俺の心から決して消えない愛しい彼女が頭をよぎる。

けどそんな都合のいい話があるわけではない。

そもそもこんなところに認定聖女であるギルティアがいるわけがないと、くだらない考えを捨てた。

それから数日後、強い魔物の気配を感じ取った。

雰囲気からして大型のグレートマミード。タイミングの悪いことに帝国で大きな祭りが開かれていて、家族がいる騎士たちは休暇を取っていた。ほかの騎士たちも巡回や魔物の討伐で手がふさがっていたので、面倒だなと思いつつも俺は単身、討伐に向かった。

——そこで目にしたのはあの日カメロン王国で見た黒薔薇の花びらと、さらに美しく成長したギルティアの姿だった。

あまりに望みすぎて白昼夢でも見ているのかと思った。

ギルティアを見間違ふことはない自信があつたが、ここは冥府の森だ。なにが起きてもおかしくない。

慎重になりつつも、心の中は歓喜にあふれていた。そこで騎士たちから上がっていた報告を思い出す。

まさか、冥府の森で自活していた女性が本当にギルティアだったのか？

「あの……？」

少し高めの透き通るような声が、俺の鼓膜を震わせる。子供の頃とは違うけど、ずっと聴いていたいほど心地いい。

俺が余韻に浸っていると、ギルティアは急に顔を引きつらせてウエストボーチを漁り始めた。

「おい！　待っ——」

そして、あっという間に姿を消してしまった。

あまりにも突然で、あまりにも一瞬で。

夢か現実か自信がなかったけれど、グレートマミーの魂は確かに天上に還^{かえ}っているし、黒い薔薇の花びらも残っていた。

ギルティアがいる。

俺の手の届く場所にいる。

それが夢ではないと確信したくて、魔道具の痕跡を頼りにギルティアの後を追った。幸いにも魔道具での転移は魔石の魔力を変換するため、わずかにタイムラグが生じる。

俺は転移魔法で先回りして、疲れた様子のギルティアに眠りを誘う香を使った。多少は卑怯なやり方だったかもしれないが仕方ない。愛しい人の健康には代え難いのだ。

「やっとな……捕まえた」

もう決して離さないと誓いながら、俺は腕の中で眠るギルティアを屋敷に連れ帰った。

屋敷に戻るや否や部下に指示を出して、カメロン王国でなにがあつたのか調べた。

結果、カメロン王国の第三王子は万死に値するという結論に至った。

俺がどんなに望んでも手に入れられなかったギルティアを、やすやすと手に入れておいて婚約破棄だと？ しかも大勢が集まる夜会でだと？ ああ、そうだ。脳みそが足りてない相手の女も万死に値するな。

改めて確認してみると、カメロン王国の国王から、ギルティア搜索のために冥府の森に入りたいと申請が届いていた。もちろん即却下しておいた。自分から手放しておいて搜索する意味がわから

ない。

今はギルティアの回復が最優先だ。それに、こんな素晴らしい女性を捨てるような王国のヤツらに渡せるわけがない。

なにより俺がもう手放したくない。ギルティアを俺のものにすると決めたんだ。

だけどもなぜ彼女は俺から逃げ出したんだ？

やはり子供の頃にたつた一度会ったくらいでは覚えてないか……いや、いいんだ。俺がギルティアのことを覚えていれば問題ない。

彼女を屋敷の一番いい部屋に運び、最高の寝具でゆっくりと眠らせる。そろそろ目覚める頃かとソワソワしていたら、突然、真上にある彼女の部屋からガタンツというものすごい音が聞こえてきた。慌てて窓から見上げたら、彼女がシートに掴まってぶら下がっていた。

驚いたのと、笑いたいのと、目のやり場に困るのと、いろんな感情がごちゃ混ぜになったけれど、とりあえず逃走は阻止できたようでホッとした。

ギルティアが俺を見つけた時の絶望的な顔が、たまらなく愛しいと思った。

そうだ、そうやってあきらめて、俺に堕^おちてきて。

またあのアメジストみたいな瞳で俺を見つめて。

美しいその声で俺の名前を呼んで。

ギルティア・エル・マクスター。君をもう逃すつもりはないのだから。

「で、ギルティアはなんと言ったんだ？」

「……黒いドレスを着ているのは死者の魂を弔うためですわ。ニコリともしないのは申し訳ないことでしたが、殿下のお話には笑顔になる要素がございませんでしたので、と」

私は今、尋問を受けている。しかも帝国軍の管理者直々にだ。

なぜだかわからないけど、婚約破棄の時の話を根掘り葉掘り聞かれていた。

「そうか、さすがギルティアだ。ククッ、容赦ないな」

「こんなことを聞いてどうされるのですか？」

ハデス様は姿勢を崩して挑戦的な視線を向けてくる。頬杖をついていても美青年なのは変わらないのね……と考えてしまう自分が情けない。

いけないわ、見目のいい男に騙されないようにしなくては。ブランド殿下の件で、学習したはずよ。しかもブランド殿下より素敵なんでも、用心しすぎて足りないくらいだわ。

「ギルティアはどうしたいんだ？」

「質問しているのは私ですわ。それから私のやりたいことは決まっています」

「なんだ？ 言ってみろ」

「とにかく自由になりたいのです。誰からも強制されず、ただ、自分の心のままに生きていきたい

のです」

彼はその言葉に腕を組む。さつきまでの楽しそうな気配はなりをひそめて、なにかを真剣に考えているようだ。

もし本当に侵入者として処罰しないのなら、ある程度自由にさせてくれてもいいと思うのだけれど。

「そうだな、善処しよう」

ハデス様の言質を取ってから一週間が過ぎた。

『善処しよう』

そう言ったわよね？ ハデス様はそう言ったわよね!? それなのに、いまだに部屋から出してもられないのだけど、どういうことかしら!?

「しかもここに来てからハデス様にしか会ってないし……待って、やっぱり私を牢屋に入れるつもりかもしれないわ」

この屋敷に来てから、ハデス様以外の人間に会っていない。彼が食事を運んできてくれて、部屋の掃除も魔道具ひとつで済ませてくれる。

身の回りのことは訓練の一環でできるようになっていたの、私は問題なかったけれど、もしひとりでは着替えもできない深窓の令嬢だったら大変なことになっていた。

「人の気配は感じるけど……私と会わせたくないのかしら？」

「なんだ？ 会いたいヤツでもいるのか？」

ヒュッと喉が絞まるような圧迫感を感じて振り返ると、ハデス様が突き刺さりそうな冷気をまとい扉にもたれて立っていた。いつもはちゃんとノックしてくれるのに、今回はいきなり扉を開けたようだ。

文句のひとつも言いたいが、全面的に世話をされている立場だ。出かけていた言葉を呑み込み、代わりに嫌味をこめて問いかけに答えた。

「違いますわ。ここに来てからハデス様以外、どなたともお会いしないので不自然に感じたのです」

私を人前に出せない理由でもあるのかと、暗に尋ねる。

だってハデス様がしているのは、本来なら侍女やメイドがやる仕事だもの。

「そうか……この部屋には近づくなど命じてあるからな。心配しなくていい」

えーと、そんな命令が出されていたの？ いったいなぜ……？ 三食昼寝つきで、十分すぎるほど贅沢な毎日を過ごさせてもらっているけれど、納得できないわ。

「ハデス様、私は他の方と交流を持つてはいけないのですか？」

そうよ、この状態は軟禁しているということではないのかしら？ 私がまた逃げ出さないように、外部との接触を絶っているのではなくて？

「交流など必要ない。俺がすべて対応する。不満か？」

ハデス様はすこぶる機嫌が悪くなつて、眉間にシワを寄せている。

ハデス様以外に誰にも会わないよう部屋に閉じ込められているなんて、環境だけは素晴らしい牢獄じゃない。やつぱりここから逃げ出さないと、私に自由はないようだわ。

「いいえ、不満はございません。わかりました。大人しくしておりますわ」

と言いつつ、私は必ずここから逃げ出すと心に誓う。私がほしいのは自由なのだ。

「そうしてくれると安心だ。そうだ、ギルティアが好きなメロントルトを用意したんだ。食べるだろう？」

「メロントルトですよの!? ええ！ もちろんいただきますわ！」

そうね、逃げ出すのはこのメロントルトをしつかりと堪能してからでも遅くないわ。私の大好物を用意してくれるなんて、なかなかやり手のようね。

「変わってなくてよかった」

「え？ 今なにかおっしゃいまして？」

「いや、ほら一緒に食べよう」

メロントルトのあまりの美味しさに、この日はうっかり幸せな気持ちで過ごしてしまい、逃亡計画は立てられなかった。

翌日は綺麗にラッピングされた包みを渡された。

「これはなんですか？」

「開けてみたらわかる」

そつとりボンを解いて包みを開けると、フワリと優しく甘い香りが鼻をくすぐった。

「これは……名店フラワーガデスの石鹸ですわね？　しかもいつも使っている私が好きな香りですわ！」

「前に頼んでいたものがやっと届いたんだ。こんな場所だから時間がかかってしまった。すまない」

「まあ、わざわざ取り寄せてくださいましたの？　ハデス様、ありがとうございます！」

せっかくだから今日はこの石鹸を使って、ゆっくりバスタイムを楽しみましょう。逃亡計画は明日考えますわ。

さらに翌日は、美しく洗練された黒いドレスをプレゼントされた。

「このデザインは帝国のものだが……どうだ？」

「まあ！　帝国のデザインはずっと憧れていましたの！　そうです、この肘から先にフレア状のレースが飾られているのが、かわいらしくてたまりません！　胸もとの金糸の薔薇の刺繍も本当に美しいですわ！　ハデス様、とっても素敵です！」

「明日は……その、俺が贈ったドレスを着てもらえないか？」

「ええ！　もちろんですわ！　ああ、明日が楽しみです！」

明日はこの素敵なドレスを着ると約束してしまったから、逃亡計画を立てるのはまた今度にしよう。

翌日は朝から張り切ってドレスに着替えた。こんな風に誰かに見せるために着飾るのなんて、中央教会ではなかったことだから心が弾んでいる。いつもは下ろしているだけの髪もハーフアップにした。

「ハデス様、早速いただいたドレスを着てみたのですが……いかがでしょう？」

「ああ、よく似合っている」

そう言っ、ハデス様がとろけるような笑みを浮かべる。いつもはわりと硬めの表情が柔らかに崩れて、破壊力が半端ない。

ちよつとこの笑顔は反則ではないかしら……!?　うっかり勘違いしそうになってしまうじゃない！　ダ、ダメだわ、いい加減流されすぎよね。毎日毎日私の心をグツと掴む贈り物をもらっても、自由がないのは変わりないわ！

私が一番ほしいのは自由なのよ!!

ブランド殿下からはプレゼントなんて贈られたことがなかったから、浮かれすぎてしまったのね。いつの間にかこの屋敷に来てから二週間も経っているわ。気を引きしめて今夜にでも逃亡計画を立てるのよ！

ハデス様が運んできた夕食をきれいに平らげた後は、ゆっくりと湯船につかってリラックスした。逃亡したら次にくつろげるのは、いつになるかわからない。

バスタイムをしつかりと堪能してベッドの上で計画を立て始める。そこで私は気付いてしまった。あのドレス、サイズがピッタリだったけど、いつ私のサイズを測ったのかしら？

「そういえば、私はいつの間にかナイトウエアに着替えさせられていたわね。……まさか、あれはハデス様が？ え？ 嘘、もしそうだとしたら、恥ずかしすぎてハデス様のお顔を見られないわ!!」

夫以外の異性に肌を晒すなんて、破廉恥だと教育を受けてきた。魔物と戦っていたから、手足を晒すくらいなら気にもならないが、着替えは違う。いくらなんでも、そこまで羞恥心を捨てていない。

「そうだわ、明日の朝一で逃げましょう。絶対に、顔を合わせる前に逃げましょう」

気を取り直して、現状把握から始めた。

扉の鍵は相変わらず掛かっている。前回逃亡に失敗したせいで結界が張られてしまって、窓からの脱出は不可能だ。そこで私はクローゼットにしまわれていたマジックポーチを漁った。

この森に入ってから、街で売ろうと薬草を見つけたのに採取していたのだ。薬草の種類や組み合わせによっては、人を眠らせる効果を発揮する。さらに野営のために持ってきていた、薬草を粉にする魔道具を取り出した。

「これを使おうかしら。チャンスは一度……失敗は許されないわ」

手持ちの薬草で最大限の催眠効果を発揮する粉を作る。

石鹼の入っていた包装紙を折って小さな箱型にし、こぼれないように薬草の粉をすべて入れた。

枕に使われていた糸を解いて、粘性のある薬草を団子状にして糊がわりにする。扉を開けたら頭から粉が落ちてくるように箱型の包装紙を取りつけた。

「ふふふ……完璧だわ！ 明日の朝が楽しみね」

私は踊りまくる胸をなんとか抑えて、ふかふかのベッドに潜り込んだ。

——コンコンコンコン。

「ギルティア、起きているか？」

翌朝、いつものようにハデス様がやってきた。

「ええ、どうぞ。準備はできておりますわ」

ついにハデス様が来たわ。朝食を運んでくださったのね。

あら、でもいつもより早い気がするわね？ まあ、いいわ。粉を吸い込まないように、距離を取らないと。

私は鼻と口を覆うようにハンカチを押し当てた。

ガチャリと鍵が開錠されて、ゆっくりと扉が開かれていく。隙間が大きくなるにつれ、糸が引っ張られ——箱型の包装紙がひっくり返った。

サラサラとした緑色の粉が、扉から入ってきたハデス様の頭に降り注ぐ。驚くような表情は一瞬で、ハデス様はそのままバタリと倒れ込んで静かに寝息をたて始めた。

「完璧に決まったわね……!!」

達成感に包まれながら、倒れ込んだハデス様を部屋の中に引きずり込もうと床に膝をついたところで、もうひとり倒れているのに気が付いた。

「え……？ どなたかしら？ 若い女性ね。この服装だとメイドかしら」
仕方ないので、ふたりとも部屋の中に入れて頭の下にクッションを置く。今回調査した薬はなかなか強力なので、おそらく四時間くらいは起きないだろう。

「本当にごめんなさい。でも、私はどうしても自由になりたいの」

ハデス様の穏やかな寝顔にちくりと胸が痛む。

朝一番で書いた感謝と謝罪の手紙を置いて、私はついに部屋の外へと脱出したのだった。

久しぶりの森は本当に空気がおいしい。胸いっぱい吸い込んで、ゆっくりと深呼吸した。

屋敷にはほとんど人の気配がなく、誰にも会うことなく外に出られた。

現在地がわからないのが不安だけど、太陽の向きと大体の時間でざっくりと方向を決めて歩出す。

目指すのは冥府の森の南側に隣接している国だ。あの国は海に面しているから、船に乗って別大陸まで渡ればさすがに追いかけてこないだろう。

「問題はどれくらいで森を抜られるかわ。なるべく最短距離で行きたいわね」

眠っている間にあの屋敷に連れていかれたから、距離感がまったくわからない。幸い聖女仕様の編み上げブーツを履いているから、歩くのに支障はなかった。聖女の制服でもあった膝丈の黒いワ

ンピースの裾を揺らしてサクサクと進んでいく。

道なき道を進む途中、不穏な気配に囲まれていることに気付いた。木の陰から私の様子をうかがっている魔物がいる。一匹や二匹じゃない。十匹以上はいるようだ。

「さすが冥府の森ね。魔物の発生頻度が高いわ」

つい三十分前にも倒したばかりだった。中央教会に入ってから、ほかのふたりの認定聖女たちと一緒に戦ってきた日々を思い出す。

『グルルル』

『ガオオオオオ』

『グルル！ ガウッ！』

「黒薔薇の鎮魂歌」

私は湧き上がる魔力を放って、アンデッドモンスターと化した魂たちを天上へと導いた。七色の魂たちの最後の言葉を聞いて送り出す。

「貴方たちの想いを私は忘れないから」

どうか安らかに、穏やかに還っていきますように。

そんな願いを込めると、黒薔薇の花びらが散り始める。見慣れた光景に安堵して、再び歩を進めた。

「この調子だと、下手したら追いつかれてしまうかもしれないわ。急がないと」
それからどのくらい森の中を歩いただろう。

途中で出会うアンデッドモンスターをすべて浄化しながらひたすら突き進んだ。

「はあ……はあ……さすがに、冥府の森ね。モンスター遭遇率がおかしいわ」

もう何体浄化したのかわからない。この三時間で三桁を超えているのではないだろうか。大型のアンデッドモンスターもいたし、小型のアンデッドモンスターは数で攻めてくる。

かといってアンデッドモンスターになって彷徨う魂を放ってはおけない。魔物はたとえ倒しても魂が穢れたままだと延々とこの世に留まり続け、聖女が魂を浄化するまで何度でも復活してしまう。そんな悲しい魂を天上に還すのが私たちだ。

私が初めて魂を天上に還したのは、母が亡くなった時だ。

ずっと病で臥せていた母は眠るように息を引き取った。まだ五歳だった私は、父と兄に寄り添われながら母の亡骸に縋って泣いた。

そんな時、母の身体が淡く光って七色の塊が身体から抜け出した。

最初はそれがなにかわからなくて、でも母の温かい笑顔と同じものを感じた。だから悲しかったけど、寂しくはなかった。父も兄もそんな私の話を否定せずに聞いてくれたから、これが特別なことだと気が付かなかった。

そのうちに七色の塊は心が形になったもの、つまり魂なのだと理解した。だから最初に見た時に温かさを感じたのだ。でも二カ月ほど過ぎたところで母の魂はどんどん七色の輝きを失い、黒い塊になっていった。

魔力を取り込んで魔物になろうとしていたのだ。次第に母の温かさを感じなくなり、それがよく

ないことだと私は理解した。

だから私は切に願った。

『お母さま、私はもう大丈夫だよ。ずっとそばにいてくれたから寂しくなかったよ。ずっとずっと忘れないから。お母さま、大好き。ずっと大好き』

どうか七色の光を取り戻して——黒薔薇の鎮魂歌！

母の魂は七色の輝きを取り戻し、最後の言葉を私に残した。

『……忘れないで。天上に還っても、ずっと貴方たちを見守っているわ。ギルティア、大好きよ』
そう言っただけで空へ昇っていく。天に還る母の魂は美しかった。

その時、私はやっと母の死を受け入れることができた。

聖女は血統により受け継がれていく。太古の昔に世界を救った女神カエルの血が流れる乙女が、純粹で強い想いを抱いた時に能力が開花するのだ。力が発現する時に浮かんた言葉が、その聖女だけの特別な魔法になる。

私はただ母に悪いものになってほしくなかった。もとの優しく温かい光に戻ってほしかった。それだけだった。

やがてその力は父と兄の知るところとなり、中央教会に所属することになった。そこから私の自由のない生活が始まった。

いつも心にあるのは、ただ安らかに魂が七色の光を取り戻せますように。それだけだ。

そして母の最後の言葉を聞いて救われた私のように、誰かの心の救いになることを願って死者の

言葉を届ける。

何百、何千の魂を浄化しても、それを伝えるまで最後の言葉を忘れることはない。それすらも聖女の力の一部なのだと理解している。

「どんなに時間が経っても、必ず届けるわ」

だから安らかに天へお還り^{かえ}。

貴方の想いは私が叶えるから。そして大切な人をそっと見守っていて。

七色に輝く魂こそが、貴方の本当の姿。

『解放してくれてありがとう……このまま、まっすぐ進みなさい。アナタのしあわせが待っている』

何体目の浄化だったかわからないけど、その魂は私に向けて最後の言葉をくれた。ごく稀^{まれ}にこんなことがある。なにより嬉しかったのは、最後の言葉は常に真実だということだ。

「やっとな……やっとな自由になれるのね！」

この先に私のしあわせが待っている、そう思うとワクワクしてたまらず駆け出した。さっきまで重かった身体が嘘みたいに軽い。

だっていつも真実しか言わない魂の言葉が示してくれたのだもの！

のんびり進んでなんていられないわ、もう囚われるのはごめんなのよ!!

私は自由に向かって、森の中を駆け抜けた。

* * *

「レクシアス様っ！ レクシアス様!!」

耳もとでよく知る側近の声が聞こえる。なにやら焦っている様子だ。浮上してきた意識は、だんだんと現実をとらえ始めた。

どうした？ なにかあった？ この焦り方は尋常じゃない……

いや待て。確か俺はギルティアの部屋の扉を開けたところで強烈な眠気に襲われたんだ。上からなにか粉のようなものが降ってきて、意識を保っていられなかった。

まさか、ギルティアになにかあったのか——!?

バチツと目を開き起き上がると、俺の右腕であるエイデンがホツとした顔で立ち上がった。

「ギルティアになにかあったのか!？」

「……ギルティア様は逃亡されました」

「は……？ 逃げ、た？ なんて？」

エイデンは長く深いため息をついて、一気にまくしたてた。

「当然じゃないですか！ 俺は言いましたよね？ こんな風に監禁していたら逃げ出したくなるって！ いくら毎日ギルティア様好みのプレゼントを渡したって、二週間もレクシアス様以外は接触を禁止されたうえに部屋に閉じ込められていたんですよ!？」

「うぐっ……しかし、誤解は解いたはずなんだが……」